

わが国における乳児の脳血管疾患による死亡の 動向に関する分析

(分担研究： 新生児・乳児のビタミンK欠乏性出血症の予防に関する研究)

母里啓子* 衛藤 隆**

要 約

人口動態統計(昭和50年～61年)を用い、乳児期の脳血管疾患死亡(死因統計基本分類430～438)について、全死因による乳児死亡と比較しながら年次推移等を比較検討した。昭和52年以前では生後4週以降2カ月未満の時期に脳血管疾患による死亡が多く認められ、生後1週以後では年代を下る毎に死亡数が減少する傾向が認められた。この時期の脳血管疾患による死亡は、全死因による死亡の減少の程度以上に毎年減少してきており、特に昭和56年以降はこの傾向が顕著であった。

見出し語： 脳血管疾患、乳児、人口動態統計、年次推移

研究 方法

人口動態統計を用い、昭和50年から昭和61年までの1歳未満における死亡数(全死因)、脳血管疾患死亡数(死因統計基本分類430～438)を調査し検討した。

結 果

1. 時期別乳児脳血管疾患死亡数の動向

死亡時期を①生後7日未満、②生後7日以後4週未満、③生後4週以後2カ月未満、④生後2カ月以後12カ月未満の4期間に分け、また年代区分を第Ⅰ期(昭和50年～52年)、第Ⅱ期(昭和53年～55年)、第Ⅲ期(昭和56年～60年)に分けて脳血管疾患による死亡数の変化をみると、図1に示されるように、a)第Ⅰ期では、4週～2カ月未満のところによく認められ、b)生後1週以後では年代区分を下る毎に死亡数が減少する傾向が認められ、c)特に4週～2カ月未満のⅡ期からⅢ期への

減少が目だつことなどが観察された。

2. 4週～2カ月未満の脳血管疾患による死亡数の年次推移と同期間の全死因による死亡数の年次推移の比較

乳児期に脳血管疾患による死亡が相対的に最も多いことが判明した4週～2カ月未満の時期について、死亡数の年次による変化を全死因による死亡と比較検討した(図2)。上段に全死因による死亡を示す。4週未満の死亡数はそれ以後の時期に比べ並はずれて多く、年次を追った減少の度合も顕著であるが、図2上段ではこの時期を省いた形で示してある。下段に脳血管疾患による死亡数の年次推移を示す。4週～2カ月未満の時期の死亡数の減少が1978年(昭和53年)以降顕著に認められるが、一方全死因によるこの時期の死亡数にも減少傾向が認められる。

そこで、脳血管疾患による死亡数を全死因によ

* 国立公衆衛生院疫学部

** 同 母性小児衛生学部

る死亡、すなわち乳児死亡数で除した統計量（仮に「脳血管死亡／乳児死亡比」と呼ぶことにする）を求め、その年次推移をみると図3のようになる。乳児死亡全体に占める脳血管疾患死亡の割合はもとも4週～2カ月未満の時期では他の時期に比べ高く、変動幅はかなり大きい。1978年（昭和53年）以降減少傾向を示し、特に1981年（昭和56年）以降は確実に年を追うごとに減少している。

考 察

乳児期の脳血管疾患による死亡は、時期としては生後4週以後2カ月未満の時期に、相対的には最も多く発生していたことが明らかにされた。このことは全死因でみると生後24時間以内が最も高頻度で、以後指数関数的に減少するというパターンとは明らかに異なる。さらに、この生後4週以後2カ月未満の時期に着目して、1975（昭和50）年以後1986（昭和61）年までの脳血管疾患による死亡の年次推移をみると、全死因で認められる減少の程度以上の割合で減少していることが明らかになったことは注目に値する。ただし、これらの変化にビタミンK欠乏性出血症によるものの寄与がどの程度あり、さらには新生児・乳児に対する予防的ビタミンK製剤の投与の効果がどの程度関係しているのかは、人口動態統計を用いるという方法をとっている限り知るすべもない。

結 論

昭和50年から昭和61年までの人口動態統計を用い、乳児の脳血管疾患死亡について以下の点が明らかとなった。

- 1) 1977年（昭和52年）以前では脳血管疾患による死亡は4週～2カ月未満のところに多く認められた。
- 2) 生後4週以後2カ月未満の時期の脳血管疾患による死亡は、全死因による死亡の減少の程度以上に減少してきており、特に1981年（昭和56年）以降はこの傾向が顕著であった。

文 献

- 1) 母里啓子，衛藤 隆：わが国における乳児の頭蓋内出血による死亡に関する分析—特に月齢による特徴について—。日本公衆衛生雑誌，35（8）特別付録Ⅲ：44，1988。
- 2) 母里啓子，衛藤 隆：わが国における乳児の頭蓋内出血による死亡に関する分析—特に月齢による特徴について—。昭和62年度厚生省心身障害研究新生児管理における諸問題の総合的研究報告書，23—29，1988。

注：上記文献1,2中に述べられている昭和62年度の研究報告の中で用いたデータの一部に誤りがあり、導かれた結論にも誤りを生じた。本報告の図1が正しいデータに基づく結果である。

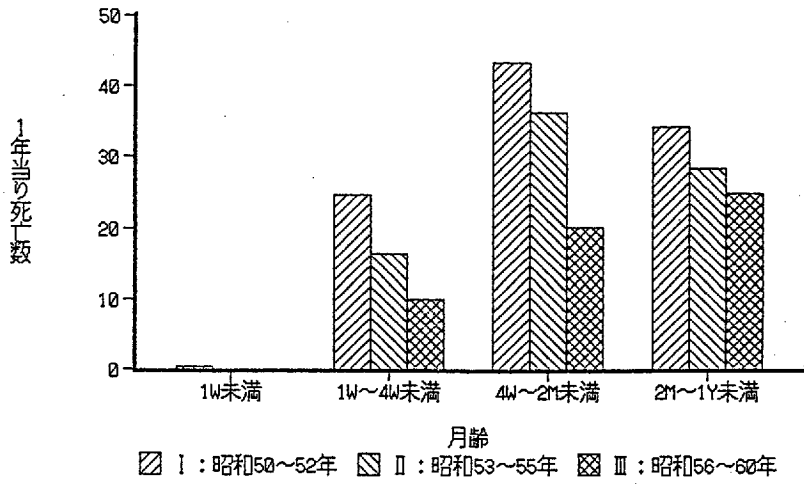


図1 時期別乳児脳血管疾患死亡数
 (全国, 男女計, 各1年当り)

図1

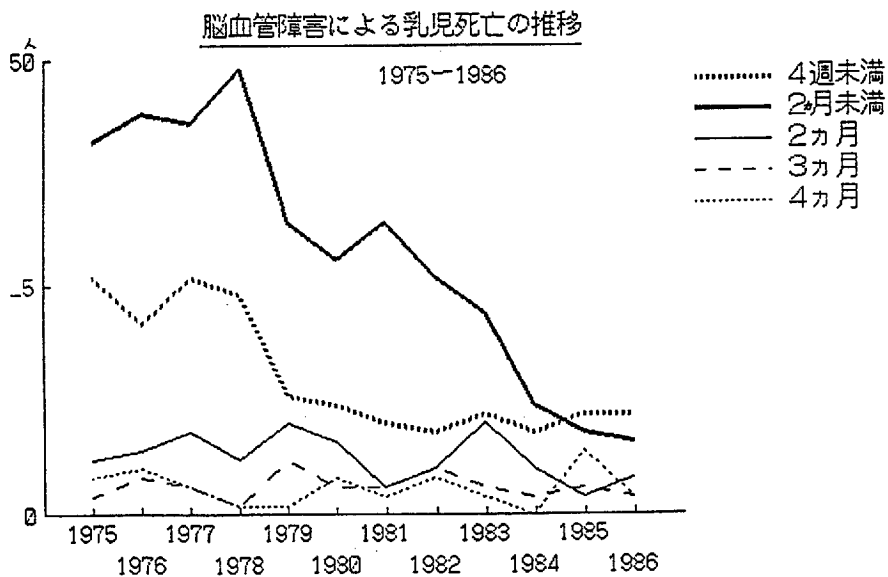
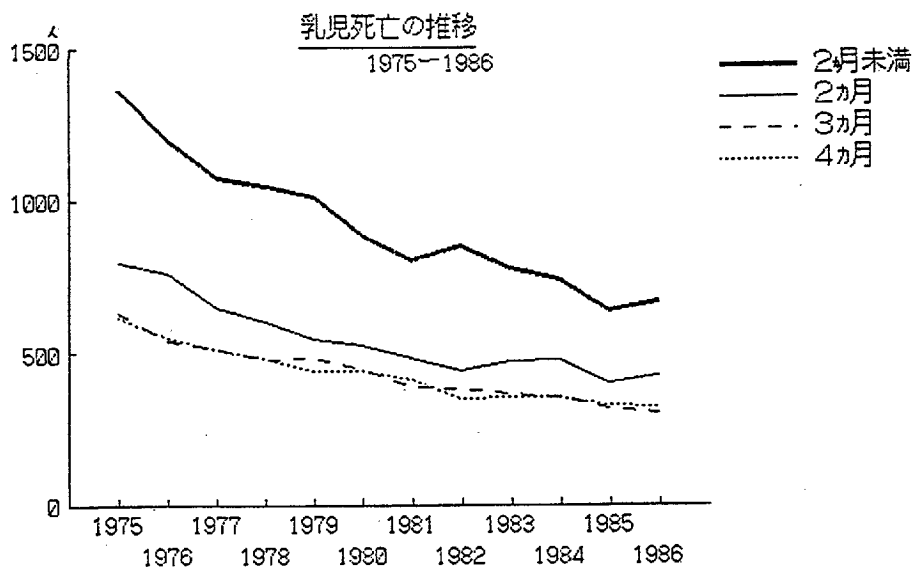


図2 乳児期における脳血管疾患死亡と全死因による死亡の年次推移の比較

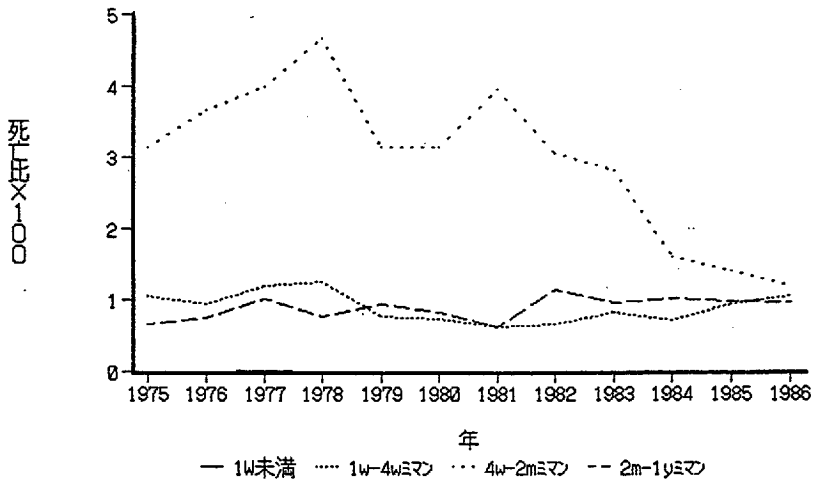


図3 時期別「脳血管死亡/乳児死亡比」の年次推移
(日本全国, 男女計)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約

人口動態統計(昭和 50 年~61 年)を用い、乳児期の脳血管疾患死亡(死因統計基本分類 430~438)について、全死因による乳児死亡と比較しながら年次推移等を比較検討した。昭和 52 年以前では生後 4 週以降 2 ヶ月未満の時期に脳血管疾患による死亡が多く認められ、生後 1 週以後では年代を下る毎に死亡数が減少する傾向が認められた。この時期の脳血管疾患による死亡は、全死因による死亡の減少の程度以上に毎年減少してきており、特に昭和 56 年以降はこの傾向が顕著であった。